

## 円系列課題における評価基準の検討

### - 幼児期後期の系列的調整について -

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
発達・福祉臨床クラスター  
下向 由希子

本研究では、円系列課題における系列的調整の発達的变化について分析し、円系列課題の評価基準を検討した。円系列課題とは、5、6歳ころの認知発達で重要視されている系列化について調べる課題である。「いちばん小さい丸からいちばん大きい丸まで、だんだん大きくなるように、できるだけたくさんの丸を描いてください」と教示されて、図形の大小関係を調整しながら描けるかが課題のねらいとなる。

実験は、4歳9か月から6歳11か月までの幼児と学童で、合計58名を対象とした。対象児58名は、4歳後半群(11名)、5歳前半群(10名)、5歳後半群(12名)、6歳前半群(12名)、6歳後半群(13名)と、生活年齢による半年ごとの年齢群に区分した。分析 では年齢群による変化の分析を行ない、分析 では円系列課題の発達的位置について分析を行った。

分析 の結果から、系列的調整は、系列を構成する要素の個数によって「3個の系列」「4個から8個の系列」「9個以上の系列」の3段階で年齢的变化が示された。系列を構成する要素の増加に伴い、画面上に描画した要素の総数も増加するが、その際、要素を配置する構図にも年齢的变化がみられた。6歳を超えて系列的調整が安定する年齢群になると、系列的調整を重視するタイプと要素の個数を増やそうとするタイプにより描画総数は2極化し、幅広い反応例が出現した。要素数を重視するタイプは、途中で系列性が崩壊する傾向にあった。分析 では、系列的調整の過程における方略で空間的系列性の調整のみ成立している場合の2例は、試行錯誤的な取り組みであり、4歳後半の中でも高い発達年齢を示した。4個以上での系列的調整を円系列課題通過とみなした場合、6歳0か月で通過率50%、6歳9か月で75%を超えた。新版K式発達検査2001の下位項目との有意確率を算出すると、6歳後半の検査課題との相関がみられた。

分析 , の結果から、円系列課題における系列的調整の発達には、次の3点が重要であると示された。系列的調整の方略は、空間的系列性と時間的系列性の両側面からの検討が必要である、系列的調整の一貫性よりも、系列性を成立させている要素の個数による評価が有効である、系列構成要素数には3段階の発達が存在し、加齢に伴い「3個」「4個から8個」「9個以上」の順に発達する。そして本研究の結果から円系列課題における系列的調整は、4個以上の系列構成要素のときに系列性獲得の1つの指標になると考えられた。しかし、系列構成要素数のみでの評価では不十分であることが示唆される結果となった。